

心優しい人々よ、今も元気でいられるであろうか。我が妹や親しい友人が、あの大地に眠っている。生まれ故郷に帰る日を夢見て、半世紀が過ぎってしまった。なぜ人間は戦争をするのだろうか。その思いを胸に抱き、空腹を抱え痛む足を引きずりながら、果てしなく歩いた日から既に五十数年経ってなお、この地球上に戦火は止まない。

憎しみ合う心で人に銃を向けるより、温かな心で優しい笑顔で向き合うことができれば、どんなに素晴らしいことだろう。いかなる場合であっても、戦争はノー、とはっきり言える自分でありたい。命の尊さを、平和の大切さを、子や孫に声を大にして語り続けていきたい。

三十八度線を越えて

長野県 片桐 信子

はじめに

平成十五（二〇〇三）年の二月八日には、私も無事に古稀を迎えることができました。五十八年前のあの苦難の道に遭遇した私が、何とか元気に七十歳の節目の年を迎えられるなどは、考えてもみなかったことです。昔は、「人生七十、古来稀なり」と言われていて、七十歳まで生き長らえるなどということは、並大抵のことではなかったのです。ましてや私のごとく、死線を越えるような避難行を経験し、幾度か死に直面する場面を、神仏の庇護と母の並々ならぬ努力によって何とか克服して今日を迎えたことは感慨無量なるものがあり、生きることの尊さを身をもって得たことを、現在の平和にとっぷりと漬かっている人々に

も分かってもらいたいものと思い、私の体験を書くことにしました。

この手記を思い出し、思い出しながら書いていても、常に私の心から離れないことは、今は亡き母のあの不撓不屈の精神力です。

私たち五人の子供を引き連れて、全員無事に故郷長野県の実家まで引き揚げてきたことは、並大抵のことではなかったはずです。長女の私は当時十三歳で、一番下の妹が小学校一年生で、その間に三人のきょうだいがいたのですが、あの苦難を乗り越えて一人の犠牲者も出さなかったということは、至難の業といわざるを得ないことです。

一 終戦までの生活

私の家は、朝鮮江原道平康郡といって、三十八度線から直線距離にして約八十キロメートル北に位置し、現在、北朝鮮と韓国の間で観光の問題でいろいろと物議をかもしている、古来から朝鮮の景勝地である金剛山側にある地で、その開拓農家でした。冬期でも降雪は比較的に少ないけれ

ど、その分寒さは厳しくて、外での仕事は大変でした。

父は、昭和二十（一九四五）年の五月に召集令状がきて、朝鮮の部隊に応召されていて、家では母が一家の大黒柱として農作業を、ほとんど一人で取り仕切っていました。それだけでも母には大きな負担がかかっていたのですが、「きつい」とか「苦しい」とかの弱音は、一切吐いてはいませんでした。男手の無い開拓農家の一家ですから、戦局がどうなっているのかなどは、全然知る由も無く、ただその日その日の仕事に追いまくられているだけでした。

ただ、学業の方は、昭和十八年ごろになるとだんだんと教室での勉強時間が少なくなってきた、飛行機の燃料になるということで、学校周辺の松林に連れて行かれて、松の根を掘り出す作業に半日行ったりしていました。また、その仕事が無いときには、草刈りをして校庭いっぱいに広げて乾燥させて、軍馬の飼料などを作っていました。が、

終戦の年になると、一日二時間ぐらいいしか授業時間はありませんでした。学校でも担任の若い男の先生は一人、二人と兵隊に行き、女の先生だけの学校となってしまいました。

当然、そのころになると日常の生活用品も不足してきて、衣料品などは配給切符による割当制となっていました。よく覚えていないのですが、多分昭和十七年の秋ごろだったと思いますが、シンガポールの陥落で、南方のゴム生産量にゆとりができたのか、兵隊さんから児童への贈り物ということで運動靴の配給があり、「兵隊さん！有り難う」という感謝の気持ちを表しながら、ひとクラス四十人に二枚か三枚の購入切符の抽選があったことをかすかに覚えていきます。運動靴の抽選に外れた者は、相変わらずわら草履を履いて通学していたものでした。

二 終戦時のこと

昭和二十年八月十五日は、平康郡でも真夏の太陽がガラガラと照りつけていました。北朝鮮特有

の真夏の昼間の暑さは格別でした。

その日は、朝から学校で授業があり、これから午後の学課が始まるということで、みんな教室に集まったところ、担任の先生が何となくそわそわした態度で、教室に一度入って来られましたが、まだ何も言わないうちに事務の人から呼び出しがかかり、慌てた様子で出て行かれました。私たち何も知らない生徒も、何となく異常な雰囲気を感じて隣の席の者と雑談を始めて、教室内はざわめいていました。しばらくそんな状態で、先生が戻って来られるのを待っていました。そのうちに教室に入って来られたかと思うと、開口一番「戦争は終わりました。日本は無条件降伏したのです。これからのことはあとで連絡します」とだけ言われて、また出て行かれました。私たちは、最初は何のことかさっぱり分からず、みんなぼかんとした顔をしていましたが、だんだんと落ち着いてくると、いろいろと考えるようになりました。「日本が負けた！」などということは考えも

及ばないことで、みんなは自分の耳を疑っていて、生徒の中には自分の耳を引っ張っている人もいました。

「そんな馬鹿なこと！ 今日、今の今まで必ず日本は勝つと信じて、物の不足にも耐えて、『欲しがりません勝つまでは！』を心のよりどころにして頑張ってきたのに、負けたなんてうそだ！ うそに決まっている」と私は思いました。周りの人もみんな同じように不審な顔をして、お互いに無言のままに顔だけを見回していました。その日は、それで授業は打ち切られて、みんなは「すぐにそれぞれの家に帰るように！」という先生の指示に従って家に向かいました。

家に帰り着く間、既に町中では、朝鮮人の人たちが鍬や鎌などの農具を手に暴徒化していて、どこでどのようにして作ったのか、そしていつ用意していたのか、即製の太極旗を振りかざして、「日本負けた！ 朝鮮勝った！」を繰り返しながら、その間に「独立万歳！」を連呼して氣勢を挙げ

げていました。

帰り道、畑で作業をしていた母に「戦争は終わったらしい。日本は負けたんだって、先生がそう言ったよ」と言いましたら、母も「うそだ！ うそだろう！ そんなデマに惑わされては駄目よ」と、私に向かって強い力を込めた言葉で言い、次いで独り言のように「そんなことはうそだろう？ そんな馬鹿なことはあり得ない」と、声を荒げて言っていたことが、今でも印象的に思い出される。

翌日、平康産業組合の組合長から、「組合員は全員集合せよ」という連絡があり、何の話かといぶかりながら、神社前の広場に集合しました。組合長から改めて「昨日、天皇陛下の直々のお言葉があって、日本は無条件降伏しました。負けたのです」と、悲痛な声と涙を流しながらの話がありました。やはり、日本が負けたことは本当のことだったのだと、みんなは事実を知り、すすり泣きをする人、地面にへたへたと座り込む人、地べた

を両手でたたく人など、みんな悔しさと悲しみと憤りを、いろいろな形で表していました。私も悔しくて悔しくて、涙が次から次へと流れ落ちて止まりませんでした。

つい昨日まで、一に儉約、二にも儉約して、そのお金で飛行機を作ることが私たちの務めであると思い、頑張ってきたのです。天皇陛下の御為と滅私奉公の気持ちで、「欲しがりません、勝つまでは！」を合言葉にして、私たちでも勝利に向かって戦争の一端を担い、銃後をしっかり守っているのだという強い使命感を持って、多少のつらいことや不自由なことをしのいでいたことが、何の意味も無くなったことは、悔しい限りでした。

私たちの年代は、生まれるとすぐに戦争の渦の中に放り出されて、戦局の推移と共に成長してきたのです。日本がこの戦争に敗れるなどということは、有り得べからざることだったのです。

最近になって、「教育」というものは、恐ろしい

ものである。無知ということとは、本当に不幸をもたらすものだ」ということが分かるようになりましたが、当時は、ただただ戦争に勝つためには自分の欲望は犠牲にしてもお国のためには、という思いでいっぱい、それに疑問をもったことは一度もありませんでした。その点では現在の若い人は、自分の考えをはっきりと持ち、それを堂々と発言するという習慣がついていて、人の話や新聞・TVなどの情報を自力で判断するという教育をされているのは羨ましいことです。

三 最初の避難行

組合長からは、「これから何分の練習、指示をするから、それまではそれぞれの家で待機するように」と達せられて家に戻りました。みんなは、たわわに実り黄金色に輝く稲の収穫寸前の田んぼを目の前には、このまますぐにここから立ち去る気持ちには到底なりません。ラジオの放送でも「開拓団員は、すぐに引き揚げる必要はないから、みんな落ち着いて現在の生活を続ける

ように」という内容の放送が、再三繰り返されて
いました。

大人の人たちは、毎日毎晩組合本部に集まっ
ては相談をしていましたが、引揚げについてのほ
きりしたことは決まらなかったようです。日はど
んどんと過ぎて、九月になりました。九月の初旬
には、とうとうソ連軍が進駐してきて、私たちの
部落にも姿を見せるようになりました。

小銃、後にそれがあの有名になったマンドリン
といわれる自動小銃であることを知りましたが、
その小銃やピストルを振りかざして、時には空に
向かって実弾を撃ちながら、家々に押し入って来
ました。家にいる者に、ピストルを胸や頭に押し
つけて脅し、押し入れの中や布団袋の間や、さら
には戸棚や机の引き出しまでも調べて、お金にな
る物をすべて没収と称して持って行きました。そ
の間における恐怖心に満ちた数十分のことは、忘
れると言われても到底忘れることはできません。

我が家では、ソ連兵が来るということが分かる

と、母は私たち子供を近くの林の中に逃げさせ
て、自分一人に対応していました。さぞ母の心の
中は大変に揺れていたのだろうと思うと、母の芯
の強さに頭の下がる思いがします。

ソ連兵の暴行・略奪が、毎日毎夜のように繰り
返されていて、これではここにいることは危険極
まりないということになり、組合長の指示で全員
避難することになりました。各人で荷物を持てる
だけ持ち、身につけられる物は、めいっばい体
につけて、第五部落の松林の中に、その日の夕方日
が暮れたら集合することになりました。総勢で五
百余人ぐらいの人が集まり、真っ暗くなるのを
待って出発しましたが、生まれたばかりの赤ちゃん
のいる家では、山羊を引っ張っていたり、男手
のある家では、毛布や布団を背負っている人も多
く見かけました。反対に、病気で寝ているおばあ
さんを家の中に残したまま避難するという、哀し
い話もありました。

出発に際して、組合本部から「赤ん坊を泣かせ

るな。泣くとソ連兵に気付かれるので、泣かせないようにしろ」という無理な指示も伝えられました。赤ちゃんを連れてくる人は、赤ちゃんの頭からすっぽりと頭巾をかぶせたり、口の周りを手拭いでマスクのように覆ったりして、少しでも声を外に洩れないような工夫をしている人もいました。

避難行動中は夜に歩き、空が白々としてくると山陰や林を見付けて、そこに隠れて日中は休んでいました。広い草原に出ると、隠れるものがなくて随分と困ったものです。休止間に大きな石などを探してきて、釜戸のようなものを造り、各家で持って来た米、麦、高粱などでご飯を炊いて、三分食分を作りました。食事が終わると、木陰を利用して体を横にしてみました。ぐっすり眠ることができず、いつソ連兵や朝鮮人に見付かり襲われるかと、びくびくしていました。そして、夕方になり辺りが薄暗くなると出発しました。

五百余人の大集団の逃避行ですから、見付から

ないはずは無いことですが、幸いに四、五日ぐらいは無事に逃避行を続けていましたが、まさにこれは奇跡的なことでした。

今日は、いよいよ三十八度線を越えられるかもしれないというときに、折悪しく天候が悪くなり、どしゃ降りの雨となり、夜も昼も小止みなく降り続き、頭から襟首から容赦なく流れ込む雨水で体の芯までずぶ濡れとなってしまい、身心共に一度に疲れが出てきました。ひと晩中、松の木の根元にみんな体を寄せ合って夜を明かしましたが、そんなときに、遂に朝鮮人の保安隊に捕まってしまうました。これで、三十八度線を突破して南に行くという希望は、あえなくも絶たれてしまいました。

保安隊によって最寄りの駅まで歩かされて、全員、無蓋貨車に乗せられて北に向かって送られることになりました。貨車の中では、大人の人们が、「荷物も取られて、着の身着のままになってしまった。これからはお金が一番大事だ！」と

言っているのが耳に入りました。また別の人が、「父親が一番たくさん食べて、子供には少しだけにする」と話し合っているのも聞こえてきました。いよいよ食糧が欠乏してきたことを痛切に感じるようになり、前途に一抹の不安を私も感じました。

元山に着いて、貨車から降ろされた私たち避難民五百余人は、大きな旅館のような建物が二棟並んでいる施設に入れられました。建物の中には、六畳ぐらいの広さの部屋に仕切られていて、私たちも六畳ひと間に数家族の親子が全部で十三人割り当てられて、その日から寝起きをすることとなりました。

翌日からは、みんなそれぞれの所で働くことになり、男の大人たちは元山港の埠頭に働きに行きましたが、その作業というのは、終戦によって日本側から奪い取った物資を、ソ連本国に運び出すための船積みの荷役作業でした。その作業に行っていた人は、悔しくて悔しくて涙を流しながら荷物を

運んだ、と帰って来てみんなに話していました。私たちのような子供でも、お金が欲しいので働きに出ましたが、作業というのは植林のための苗木を運搬する作業だったと記憶しています。仕事に行くときもお腹がすくので、帰りには通り道にある畑に入り込んで、大根を盗んでいましたが、ときには畑の主の朝鮮人に見付かり、棍棒で追いかけてられてほうほうの体で逃げ帰ったこともありました。

収容所での食事は、朝は高粱のお粥が茶碗みたいな入れ物に軽くつがれたものだけでしたが、私はどうしても食べることができずに、母に随分と心配をかけたものでした。母は、お金が少し入ると、私たち子供を連れて闇市に行き、お魚を買って食べさせてくれました。避難民家族の母親が、子供たちに少しでも栄養のある物を食べさせようと、どれ程苦労をしたのか、私が成人して母親の立場になったときに、改めてその苦労に思いを致し感謝の念を禁じ得ません。

収容所生活が続くと、栄養失調から母乳が出なくなつたことと、高粱のお粥が原因で消化不良を起こしてしまい、三歳ぐらいから下の子供たちが次から次に死んでいきました。

そんな毎日が続いているうちに、今度は夜中になるとソ連兵が、軍靴を履いたままわざと音を立てながら各部屋に押し入って来て、若い母親や娘を捜し出していたずらをしたり、無理矢理に引張って連れ出そうとするようになってきました。そのため、顔に鍋墨を塗って男の顔のようになりました。するとソ連兵の方もやぶれかぶれになってきて、男の人にも乱暴を働くようになりました。

夜、十一時ごろになると、ソ連兵は自動車に乗って来て、寝ている男の人をわざわざ起こしては、外に連れ出して太い棒でたたいたり、つついたりしていたようで、静かな闇の中から男の人の悲鳴が聞こえてきました。部屋の中でその悲鳴を聞いても、助けに行くこともできず、ましてや見

に行くこともならず、ただただ恐ろしくて、まんじりともできずに、夜通しぶるぶると体が震えていました。早く朝が来ないかと、そればかり祈っていたことを思い出します。

こんなこともありました。私たちの寝ている部屋に、例のごとく土足のままで上がり込んで来たソ連兵が、入口の隅の方で体を堅くしてうずくまっていた私の胸を触っていきました。これは、子供か年ごろの娘かを見分けるつもりでいたのだと思います。普通は、子供たちが部屋の入口付近で寝て、母たち女性は部屋の一番奥の方で固まって寝るようにしていました。

林の小父さんが、大事にしてその日まで隠し持っていた背広を取って行かれたのも、このころのことだったと思います。このように、毎晩のごとくにやってきては、どこかの部屋を襲ってめぼしい物を強引に盗んで行くのでした。自分たちの望んでいるような物がないと、いたずらをしていくのでした。

そのような、生き地獄での生活が五十日ばかり続きました。習慣というものは恐ろしいもので、ソ連兵が自動車に乗って来ては、殊更にクラクションを大きく鳴らして収容所に入って来て、乱暴・狼藉な行爲をした夜の十一時ごろのことは、日本に帰り、そして就職のために大阪に行くころまで、その時間になると周囲の音がみんなソ連兵の乗って来た自動車の音になり、何をしていてもはっとなり、体が硬直するような感じが続いていました。

収容所では、天気の良い昼間には元山の裏手にある小高い山に登って、眼下にある海を眺めては、「いつになったらここを出られるのだろうか?」とか、「日本に帰ることができるとかしら?」などと話し合っていました。そのような日はなかなか来そうにはありませんでしたし、多くの人は半ばあきらめ境地になり、ここ元山で生活することも考えるようになっていました。

四 再び、平康に戻る

元山での生き地獄のような毎日の生活が続いていたある日、突然に平康に戻ることが決まりました。私たちは、同じ避難民生活であっても、地獄の元山より、住み慣れた朝鮮での故郷、平康での生活の方が明るい希望を持って、無条件で受け入れられたとのことでした。元山から平康に移ることの一番の理由は、元山では、もう五百人以上の避難民に食べさせるだけの食糧が無くなったためということであつたようです。

避難民一行は、かつての生活地平康を思い出し、夢と希望を持ち意気揚々として元山を出発しました。平康に近くなるに従って、みんなの顔つきは喜色満面となってきましたが、平康にたどり着いた途端に、一変して顔面蒼白となりました。私たちの第六部落の家々には全部、ソ連兵とその家族が入り込んで生活していたのです。また、小さな家は馬小屋になっているところもあつて、私たち元部落民の入れる余地は全然ありませんで

した。少し離れた第二部落には、ソ連兵も入っておらず空いていましたので、その中で適当な空き家を見付けて、そこに取りあえず三世帯が一緒に住むこととしました。

毎日の生活は、ソ連兵の家族と一緒にでした。井戸水を汲み上げるのもソ連兵と共同作業でしたし、食事の仕度も、ソ連人の女性と隣になりながらしていました。まさに、ここでの生活は異域同舟そのものでした。

ソ連兵は、私たちを見て「黒パン」をくれるというので母に話したところ、母は「もらっては駄目だ！」と、強い口調で私に向かって言いました。その理由は、それをもらおうとそれがきっかけとなって家族に接近をしてきて、挙げ句の果てに母や若い女性が連れて行かれるということでした。そのことを母から聞いたら怖くなって、ソ連兵が近付いて来ると、すぐに逃げるようにしていました。

食糧などは、幸いに以前住んでいたところでし

たので、戦前から付き合っていた朝鮮人の人たちも親切にしてくれていて、我が家に入入りしていたオモニの家から分けてもらっていました。ここから出るときに、我が家にあった家財・家具、その他の物一切は、みんなそのオモニに渡してきたので、恩義を感じていたのでした。

私も、泊まりがけで遊びに来るようになると再三再四言われていたので、ある日のことひと晩泊まりに行きましたが、見慣れた我が家の箆笥や鏡台や茶棚などが、狭い部屋いっぱいになってありましたが、その部屋で寝かせてもらいましたが、思い出の多い物が並んでいるのを眺めていると、「これが敗戦という現実なのか」と、複雑な気持ちに浸ってしまいました。

寝るときは、用心のためにオモニに言われて一斗缶を枕元に置いて休みましたが、心配していたとおり、夜中にソ連兵が侵入してきました。物音にびっくりして飛び起きて、一斗缶をがんとたたきました。そんなことには全然お構い

なしに寝ていた部屋に入って来て、一人一人を見ては年を聞き出していました。私は、仕方なく手まねで「十三歳だ！」と伝えたのですが、なかなか本気にしてくれずにはいましたが、オモニが説明してその場は難を逃れることができました。

こんなことが繰り返されていると、いつまでもここに住むことは安全ではなく、逃げ出すこととしました。今度は、大勢では目立つので少人数に分かれて脱出することとなり、準備を進めました。オモニが心配して、「必ず無事に日本に帰れるように」と言って、炒豆やおにぎりなど当座の食べ物を作って持たせてくれました。暗くなるのを待って、第二部落と別れて南に向かいました。

五 再度の避難行で三十八度線突破

暗闇の中を何時間ぐらい歩いたのか記憶が定かではありませんが、高い山に登った所で夜が明け、朝になりました。第一回の逃避行と同じように、明るくなると近くの林の中に隠れて休止をしていました。ある日の明け方、下の方に数人の人

影が見えたので、慌てて林の中に隠れました。そのときは特に変わったことはありませんでしたが、それから二、三日後の夕方に、朝鮮人の男性三人と行き会いました。その人たちが、「夕飯を食べさせる」と言うので、有り難い申し出であったので付いて行きました。言葉どおりに食事を振る舞ってくれました。十日ぶりに温かい食べ物を食べてほっとしました。「今晚はここで休みなさい」と、親切な申し出に警戒心もゆるんで、ひと晩手足を思う存分に伸ばしてゆっくりと寝てしまいました。翌朝は、朝食まで頂き再び歩きました。相手の朝鮮人の話が耳に入ってきて、どうやら私たち一行を保安隊に密告しようとして、二、三日前から付け狙っていたらしいのですが、どのような事情からかはよく分かりませんが、取り止めたようでした。危うく難を免れた私たちは、そのまま何事もなかったように逃避行を続けました。

そろそろ三十八度線も近づいたと思われたある

日の夕方、真つ赤な太陽が西の空に傾き、徐々に地平線に近づいてくる素晴らしく美しい夕焼け空に見とれていると、野良仕事を終えて馬車を引きながら家路を急いでいる、農民の姿が目に入ってきました。まことにこのどかで、絵を見ているような気持ちになっていました。だが、現実の問題としては、一体全体どの道を進めば三十八度線を越えられるのかと、私たちは途方に暮れながら歩いていました。しばらくすると一軒の農家があった、そこで三十八度線を越えるにはどの道を行ったらよいかと母が聞きに行ったところ、その主人らしき人から、「いくら奥さんが朝鮮服を着ていても、日本人だということはすぐに分かりますよ。それに、こんなに大勢の子供を連れて歩くのは無理だし、危険だ。一番上か一番下の子供を置いていけば、将来はちゃんと学校にも出してあげるよ」と言われたので、母は「どちらも置いて行くことはできない！」と言って、きっぱりと断ってきたと話していました。母は何かの場合に

と、カミソリの刃を用意して行ったということも、あとで聞きました。

そんなこともありましたが、再び疲れた足を引きずりながらとぼとぼと歩いているうちに、細い道があり、その左側の石に一人の青年が腰掛けて休んでいました。私たちがそこを通り過ぎようとしていたら、その青年が立ち上がり、私たちに近づいて来て「今からどこに行かれるのですか」と丁寧な言葉で話し掛けてきました。母が、「これから三十八度線を越えなければならぬのですが、どの道を進めばよいか分からなくて困っているとところです」と答えたら、その青年は「私が案内しましょう！ この先を行ったところに民家があるが、そこで見付かるとソ連兵に密告される。そのように各部落に通知が届いているから、どこに行っても危険です。私が百メートルぐらい先を歩くので、見失わないようにして付いて来なさい」と言ってくれました。私たちはあまりの親切さにちよっと疑いを持ちましたが、日も沈んで

辺りは薄暗くなってきたので、その青年の言葉に頼るほかありませんでした。

青年を見失わないように目を凝らしながら、一生懸命に付いて歩きました。百メートルばかり行くと部落がありました。ちょうど夕食の時間帯で、外に出ている人は無く、無事にその部落を通り過ぎることができました。夜道を、青年の姿を見失わないようにしてしばらく歩いて行くと、松林がありました。青年はそこで立ち止まり、私たちの方に振り向いて、「私は今から家に帰って夕飯を食べてくるから、ここで待っていてください。十二時までには必ず戻りますから」と言っただけでそのまま行ってしまいました。私たちは、「だまされているのではないか?」「このままここにいて密告されたら、みんな捕まってしまうだろう」と話し合いましたがどうすることもならず、運を天に任せることにして、その松林の中で休むことにしました。寒さが厳しくなったので、松の枯木を集めて焚き火をしながら、残り少なくなっ

きた炒り米や炒り豆を食べて時間を過ごしました。

月が出る十二時ごろになると、約束どおり青年が現れました。てっきりだまされたと思っていただけに、その青年に対する信頼感が出てきて、「本当によい人なんだなあ」と、子供心に思ったものでした。青年は「大変にお待たせしました。これから案内します」と言って、再び先頭に立って歩き始めました。その夜は雲一つ無く皓々とした月光で、昼のような明るい夜でしたので、歩き易く、みんなの気持ちも軽やかでした。

六 悲願の南へ

どのぐらい歩いたのかちょっと記憶が薄れてしまいました。河原のような所に出て、石ころを踏んで歩いていました。案内の青年が「これで三十八度線は越えました」と、何気ない態度で言いました。私たちはびっくりしたと同時に、急に疲れが出てきたような気持ちになりました。「これで、本当に日本に帰れる」と思うと、何か体が軽

くなつたようでした。青年はさらに言葉を続けて、「京城（ソウル）まではまだ長くかかりますから、気を付けてください。あそこに三人ばかりの男が立っています、絶対に話を聞かずに、私の教えたとおりの道を行ってくださいよ」と、念をおすように繰り返して言っていました。「あの男たちに、近道はこっちだと言われても、それに付いて行くと、また北に戻ってしまいますよ」とも言っていた。一番鶏が鳴き始めるころでした。

母が、「ご親切に対してお礼の気持ちだけですが」と言ってお礼の気持ちを述べた。青年は「自分は、家に食べる物もあるし寝る所もあります。あなたたちは、これからまだまだ大変なのです。お金は大事にしてください。受け取るわけにはいきません」と、きっぱりと断っていました。みんなで心からのお礼を述べて別れました。今でもその青年に会うことができるならば、会ってお礼を述べたい気持ちでいっぱいです。

ここから京城までは、二里とか三里とかと言わ

れましたが、私たちは一刻も早く京城に着きたいという気持ちが高じ、そのうちに焦りの心に変わって、あの青年の言ったことを忘れて近道を行こうということになり、山道を登り始めました。

そのうちに妹の足が腫れ出して歩けなくなり、母が妹を背負い、私が母が背負っていたリュックサックも背負って登りましたが、山は思っていたよりも高く、なかなか越えることができず、ひたすら歯を食いしばって歩き続けました。夕方になって、やっと広い道路に出ることができました。その近くの安宿に泊まり、翌日にバスに乗って京城に入りました。

京城で収容された施設は、素晴らしい立派な建物で、何十畳敷かの広い部屋に入りましたが、私たちと同じ避難者が大勢いて、ごった返していました。そのうちに、平康で別れた人たちも次々と避難して、この施設に収容されました。着物を頭に載せて裸のまま深い川を渡ってきた人、ソ連兵に撃たれたが、幸いにあたらず逃げてきた人な

ど、話を聞くとみんな何がしかの危険な目に遭いながら、ここまで何とか生きてたどり着いた人ばかりでした。

疲れているので、横になるとすぐに眠ってしまいました。間もなく体中が痒くなってきて寝ていられなくなってきました。起きて下着を見ると、縫い目という縫い目にはびっちりと虱が湧いていました。頭から足先まで虱だらけでした。

京城に三日間収容されて、釜山に行けるようになりしました。

七 いよいよ日本へ

釜山から引揚船に乗船して博多に着きました。博多では頭からDDTをかけられて全身真っ白になりましたが、そのお陰で虱も随分少なくなりました。九月十日ごろ平康の我が家を引き払って、約三カ月かかって日本内地の土を踏むことができました。博多港で日の丸の旗を見たときは、全身から何となく勇気が湧いてきたように感じました。あのとときの博多での日の丸を見た感動は、

今になっても心に残るほど強烈でした。

博多から満員の汽車で豊橋まで行きましたが、着いたのは夜半になっていました。駅は空襲で焼けたそうで、駅の周辺は焼け野原でした。焼け残った倉庫が一棟あり、中はがらんとしていましたが、そこに入って焚き火をしながら一夜を過ごしました。ここまで一緒に行動した金井さん一家と別れて、乞食のような姿で、両親の故郷、下伊那郡の豊丘村に向かって電車に乗りました。

父の実家に着くと、父が元気な姿で迎えてくれました。幸いにも父が入隊した部隊は南朝鮮側だったので、三十八度線を越える必要もなく先に復員していたのでした。家では、大きな釜で湯を沸かし、着ていたものを全部脱いで消毒をしました。それが一番最初の出来事でした。

それからが大変、一度に六人も増えたのですから、本家の人たちにも大変な迷惑をかけることになりました。本家の人たちの温かいお世話を受けているうちにひと月が経ち、私たちのきょうだい

は、別れ別れになることになりました。次女と三女は母の実家に、長女の私と四女と長男は両親と共にここに残り、本家の物置小屋を飯の住まいとして、生活再建の第一歩を踏み出したのです。

私は高等科を卒業すると、すぐに大阪の鐘紡に就職しました。ホームシックなどを起こして泣いている暇はありませんでした。一円でも多く家に送金したいと、そればかりを考えて働きました。

家を助けなければならぬという思いでいっぱい、がむしゃらに頑張りました。食べ物も、朝食はお米粒が泳いでいるようなお粥をすすり、昼はトウモロコシの粉で作った黄色いパンをかじり、夕食にはやつとひじき入りご飯を食べました。

弟や妹たちも、中学を出るとそれぞれに働きに出ました。母は、授産所で「機織り」の仕事に精を出していましたし、ときには近所の野良仕事にも雇われていました。

こうして、家族がそれぞれの所で一生懸命に働いたお陰で、本家から土地を分けてもらい、そこ

にささやかながらも私たちの家を建てることになりました。

このときをもって、私たち一家の終戦がやってきましたような思いになりました。

北朝鮮からの逃避行

静岡県 勝海 幸男

一 生い立ち

私の父は、明治三十（一八九七）年、三島市近郊の大仁町で生まれ、大正五（一九一六）年に北朝鮮羅南第十九師団騎兵第二十七連隊に現役で入営、大正十二年曹長で除隊した。母は、明治三十六年に伊豆長岡町で生まれ、大正十三年、静岡県三島市において土木建築請負業をしていた父と結婚した。ある工事で父は失敗し、羅南の知人で兵隊仲間でもあった、湯山保十郎さんを頼り、昭和五（一九三〇）年春に渡鮮した。当時私は四歳